
メグタマ！

式部雪花々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メグタマ！

【Zコード】

Z3046BA

【作者名】

式部雪花々

【あらすじ】

新人女性刑事の朝井環^{たまき}が初めて一人で逮捕したのはプロカメラマンの及川環^{めぐる}。

だが、これがまた誤認逮捕^{めぐる}ときたからさあ大変！

メグルとタマキ、これが二人の奇妙な縁の始まりだった。

シリーズ1・誤認逮捕+殺人事件=腐れ縁の始まり？

シリーズ1・第一話

五月。

ゴールデンウィークも終わり、ようやくいつもの生活サイクルに戻った頃、

夜景がよく見える高台の公園に一人の男の姿があった。

「なーんか、周りがみんなカッフルなのに野郎一人で夜景の撮影なんて、

仕事とはいえ虚しいつすねー」

一人は源五郎丸哉曾吉。

カメラマンの助手をしている一十五歳の若者だ。

本日の撮影ポイントに車を停め、運転席でぼやいた哉曾吉は溜め息を吐いた。

「そんな愚痴言つてると余計虚しくなるだ?」

そう助手席で苦笑いをしたのはもう一人の男、及川環、三十一歳。

哉曾吉の師匠でカメラマンの彼がこの物語の主人公の一人である。

「まあ、そうですね」

哉曾吉はメグルと共に車から降りると、せっせく撮影の準備に取り掛かった。

そして、こぞ撮影を始めようとメグルがカメラを構えたその時、

「ちゅうど、あなた達！ そこで何をしているのー！」

後ろから声を掛けられた。

いや、どういかと言えば“怒鳴られた”感じではあるが。

メグルと哉曾吉が振り返ると、そこにはグレーのパンツスーツ姿の女性が腕組みで仁王立ちをしていた。

見たところ二十代前半だろうか。

「まさか、カップルを隠し撮りしているんじゃないでしょうか？」

ツカツカと大股で歩み寄つて来る女性。

「アンタの方こそ何だよ？俺達はここで夜景の撮影をしているだけだ」

短気な哉曾吉は彼女の物言いにカチンと来たようで、やや喧嘩腰になつた。

「ゲン」

メグルはそんな哉曾吉を宥めながら女性の方に向き直つた。

「公園の管理事務所の方ですか？」

「いいえ、じうじう者よ」

女性はメグルの質問に答えるべく、ジャケットの内ポケットから警察手帳を出して二人に見せた。

名前は朝井環。あさい たまき

二十歳の新人刑事で彼女がこの物語のもう一人の主人公である。

（俺と同じ名前？ いや、女の子だから“たまき”かな？）

「職質なら初めから警察手帳出しゃいいのに……」

ボソリと呟く哉曾吉。

「こ」の辺りは最近、女性を狙った痴漢や隠し撮りが多発しているからパトロールをしていたところなの

「そうですか。けど、俺達はちゃんと許可を得た上での撮影ですか
ら」

メグルは公園の管理事務所が発行した撮影許可証をタマキに見せた。

「これ、本物でしょうね？」

しかし、どこまでも疑うタマキ。

「そんなにお疑いならその許可証に載つてゐる管理事務所の連絡先に
問い合わせしてみたりじりですか？」

それでもメグルは哉曾吉とは対照的に淡々とした口調で言つた。

「……」

その様子にタマキはやや眉間に皺を寄せ、撮影許可証をメグルに返
した。

「わかつたら、撮影の邪魔だから帰つてくれる？」

哉曾吉がムツとしたままの顔で言い放つ。

「……」

すると、タマキは苦虫を噛み潰したような顔で踵を上げ、スタスタ
と歩いて行つた。

「……つたく、なんなんすかねえ？ 今の」

哉曾吉は彼女の後姿を睨み付けながら吐き捨てるよ／＼言つた。

「女だからつて舐められたくなくて態と強い口調で言つたんだろ」
だが、メグルは特に気にしている様子もない。

「メグさんて“大人”つすね？」

「そう考へれば腹も立たないつて事だよ。それより、ちやつちやと
撮影終わらせて帰ろ／＼ぜ」

「はい／＼

哉曾吉はビシッと敬礼して返事をするが、メグルのサポートをする
べく彼の傍らに駆け寄つた。

その数日後。

メグルが仕事帰りにある高級マンションの前を通り掛かると……、

（あれは……）

ただいま人気絶頂の俳優がこれまた超人気女性アイドルの肩を抱いてマンションに連れ込んでいた。

すぐさまいつも持ち歩いているコンパクトサイズのデジカメで撮る
メグル。

周りには記者やカメラマンらしき人物はいない、この現場を押さえたのはどうやらメグルだけのようだ。

そうなると大スクープになる事だつて有り得る。

メグルはデジカメに収めた画像を確認して踵を返すと足早に事務所に向かって歩き始めた。

そして事務所まで後、数十メートルの所まで戻ったその時！

「待ちなさい。」

後ろから声がして腕を捕まれた。

「え？」

メグルが足を止めて振り返る。

すると、そこには先日、丘の上の公園で会った女性刑事・朝井環が立っていた。

「またあなたなの？」

怪訝な顔をするタマキ。

（それせこいつの台詞なんだが……）

「あの、何ですか？」

「婦女暴行の現行犯であなたを逮捕します」

ガチャーンと音を立てメグルの手首に嵌められる手錠。

「え？ ちよ……っ」

「言ひ訳は署の方でたっぷりと聞くわ」

「待てよ、一体何を根拠に……っ」

「田撃証言」

「はあっ？」

「被害者と田撃者の証言が一致しているの」

「何だよそれ？ 僕の言ひ分も聞かずにはいきなり逮捕？」

「だから、言い訳なら署の方でゆっくり聞いてあげるわよ」

そう言いながらタマキは無理矢理メグルを車の後部座席に押し込め

た。

「…………

メグルは今は何を言つても仕方がないと觀念し、後ろに見える事務所を見つめながら軽く溜め息を吐いた。

（せつかぐのスクープなのに……）

「朝井、容疑者を逮捕したつて？」

警察署に入るとすぐに一人の男性刑事が駆け寄つて來た。

「はい、この男です」

「思いつきり誤認逮捕ですけど」

メグルは一人に聞こえるように呟いた。

眉根を寄せたタマキと男性刑事。

「そんな事を言つてられるのも今のうちよ」

タマキはそう言つと取調室のドアを大きく開けてメグルに中に入る
よつ頸で指示した。

「是永さん、お願ひします」

メグルを椅子に座らせるとタマキは一緒に取調室に入った男性刑事・
是永多美男これなが たみおに言つた。

「今日は初めてお前一人で逮捕した容疑者だろ？ 取り調べもお前
がやつてみろ」

「え……、は、はいっ」

タマキは少し嬉しそうに返事をするとすぐに再びキリッとした表情
に戻り、メグルの向かい側に腰を下ろした。

「まあ、あなたの以前と年齢を聞こなさー

「及川環、三十一歳」

「一応、偽名は言つていなこないね」

メグルの荷物を全て取り上げた後、免許証から書き[与]したのか彼の名前や年齢、住所や連絡先までもが既に調査として

タマキとその横に立つている是永の手元にあった。

「それで？ 僕はいつどいでどんな風に女性に暴行をえたと言うんですか？」

メグルはやや不機嫌そうに口を開いた。

「それを今からじつちが訊くんでしょうが

「いや……だから、僕は誤認逮捕で連れて来られたんだから、何を

訊かれたって答えられないですよ

「まだそんな事を言つてゐるの?」

「なら、逆に訊きますけどその田撃情報つてなんなんですか? その人達が俺の顔を見て

『あの人です』って言つたんですか?」

「そんな事、容疑者あなたに言える訳ないでしょ?」

「朝井、落ち着けよ。これじゃまるで子供の喧嘩だぞ?」

見かねた是永が思わず制止に入る。

「……すみません」

「まず犯行があつた時間、どこにいたのか訊いてみれば?」

先輩らしく的確な指示をする是永。

「はい」

タマキは返事をしてメグルの方に向き直った。

「今日の午後六時から七時頃、あなた、どこにいたの？」

「その時間でしたら……新宿である人物を取材の為に張つていまし
た」

「新宿？　品川じゃなくて？」

「ええ、新宿です。証人もいますよ。仕事仲間ですけど」

「……ある人物つて誰を張つていたの？」

「それは言えません」

「何故？」

「いへり取調べだとは言へ、俺は無実ですから仕事上、秘密にしておきたい事まで話す必要はないからです」

「無実かどうかは私達警察が決める事よ」

「…………なるほど…………〔冤罪がなくならない訳ですね」

メグルはフッと軽く溜め息と共に本音を吐き出した。

「なんですか？」

バンッとデスクを両手で叩き、立ち上がるタマキ。

「俺は訳もわからず、あなたにいきなり手錠をかけられて連れて来られたんですよ？」

しかも罪状が『婦女暴行』なんて身に覚えのない事を……急ぎの仕事だつてあるし、

その後、人と会う約束もしてゐて言いつて言いつて言いつて

そもそもメグルがあの高級マンションの前を通り掛ったのも待ち合わせ場所に向かっている途中だった。

しかし、思いがけずスクープが撮れた為、事務所に引き返していたのだ。

「それは残念ね。犯人のあなたは罪を認めなければこのまま拘束されるし、

認めたとしても拘置される事になるんだから、どちらにしても仕事も出来ないし、約束も破る事になるわ」

「あ、そ……もつ話にならない……だつたら、好きなだけ俺の事を調べればいいし、

「ここに拘束しておけばいい。ただその代わり俺が無実だとわかつた時はそれなりの責任を取つて貰いますよ?」

「な、何よ……齧してゐつもつ?」

メグルの鋭い皿つきに去んだタマキ。

「別に」

「私に刑事を辞めるとでも言つの?」

「そこまでは言つてないですよ。せっかく撮ったスクープが台無しになつた時の損害賠償をして頂ければ」

メグルはさう言つともう何も喋つたくないといつ顔で黙り込んだ。

シリーズ1・第一話

それから一時間後、

「……」

メグルは黙秘を続け、

「ちょっとおー……」のまま黙つてたつて時間の無駄よ?」

そんな彼にタマキは面白を促し続けていた。

タマキの後ろでは是永がじつと様子を窺つている。

そうしてまたしばりくすると、取調室のドアを少し荒っぽくノックする音が響き、

革ジャンにジーンズとラフな格好をしている一人の若い男性刑事・竹岡が入つて來た。

「是永さん」

竹岡は是永に近寄り、何か耳打ちをした。

すると、是永の片眉がピクリと動いた。

そして竹岡が取調室から出て行くと

「……及川さん、お帰り頂いて結構です。長時間お引止めして申し訳ございませんでした」

是永はメグルに丁重に頭を下げた。

「……、是永さんっ、何を……っ？」

その行動に慌てるタマキ。

「朝井、お前の早とちりだ。及川さんは犯人じゃない。たった今、長原が犯人を逮捕した。

被害者に面通しして確認もして貰つたから間違いないそうだ」

「でもっ、この男だつて田撃証言とぴつたり一致します！」

「だが、彼の面通しでの田撃者の反応は『違つ気がする』と言つて

いた。

それでも、まだはつきりとした事がわからないから俺も黙つて様子を見ていたが……、

長原が逮捕した男は田撃証言、被害者の面通しの証言も揃つている

「そんな……」

愕然とするタマキ。

「……」

その横をメグルはスタスタと通り過ぎて取調室を後にした。

(はあ……。」の時間じゃ、もうスクープはおじやんだな……。)

メグルは腕時計で時間を確認すると大きく溜め息を吐き、

スクープを諦めて約束していた人物との待ち合わせ場所へと向かつた。

(一応、来てはみたものの……アーッ、もう帰つてんだろうな……。)

待ち合わせ場所の店まで後数メートルの所まで来ると、メグルは歩く速度を落とした。

「……あ、あのっ、及川さんっ」

すると、後ろからタマキが駆け寄つて來た。

「え……、まだ何か……？」

その声にやや眉間に皺を寄せて振り返り、足を止めたメグル。

「い、いえ……あの、本当に大変申し訳ありませんでしたっ

今までの強気な態度とは打って変わつても弱々しい感じで深々と頭を下げる謝罪するタマキ。

「あ、あのー……そ、それで、そのー……お詫びといつてはなんですが……今から食事でも……」

「別にいいよ。それに今から人と会う約束……て、言つてもまだ待つてるかどうかわからんけど、とにかく……」

と、メグルとタマキが立ち話をしていると、

「メグ？」

目の前のダイニングバーから出て来た女性がメグルに声を掛けた。

「依子……」

それはメグルが約束をしていた相手であり恋人の常盤依子ときわ ようじだった。

「……仕事で遅くなるって連絡しておいて、その子と遊んでたの？」

少し冗談っぽい口調で言った依子。

「…………」

だが、メグルは何も否定しない。

その所為で依子はタマキの事を勘違いしてしまった。

「まさか、本当にそうだったの？ 最低」

声は荒げていらないものの完全に怒りてしまつたようだ。

メグルとタマキに背を向けてスタスタ歩き出す。

「え……ちよ、あの……っ、私……違いますっ」

タマキがハツとして否定しようとした時には既に遅く、依子は
もつ十数メートル先まで歩いて行つていた。

「どうして否定しないんですかっ？」

彼女を追い掛けよつともせず、誤解を解いてつともしないでいるメグルにタマキが向き直る。

「いいよ、別に」

「及川さんが追い掛けなら私が追い掛けで誤解を解いて来ます！」

「やめておいた方が良い」と思つけども。

「行つてきまー！」

メグルが止めるのも聞かず、タマキは既に人ごみに紛れてしまった依子の後を追つた。

「……無駄だと思つけどなあ」

そんな彼女の後姿を見つめながらメグルは小さく溜め息を吐いた。

「あ、あのっ、待つてここに」

タマキはカツカツヒールを小さく鳴らして歩く依子を呼び止めた。

「……」

怪訝な顔で振り向く依子。

「あの……何か誤解していらっしゃるようではな……私は、及川さんとはなんでもないです。」

「……」

「確かに及川さんが待ち合わせに遅れたのは私が原因です」

タマキの話を無言で聞いている依子。

「……」

「実は……その……私が及川さんを誤認逮捕してしまって……それで今まで取調べを……」

「たゞ？」

依子はあまりに突拍子もない理由に思わずそんな声が出た。

「だから、その……」

「あなた、誤魔化すならもう少しまシな嘘を吐けば？」

ばつが悪そつに言葉を続けるタマキに呆れたように依子が言ひ。

「え……」

タマキが言葉を詰まらせて いる間に再び歩き出す依子。

いつせりひてひびく怒りせてしまつたよつだ。

「あ……」

タマキは彼女を追い掛ける事が出来なかつた。

（はあ……今日は全然ついてないなあ……誤認逮捕はしちやうし、及川さんの約束のお相手を、

誤解を解くべきかますます怒らせちゃうし……及川さんになんて言えばいいんだろ……）

トボトボと引き返しながらタマキはメグルに対し、どう説ぎよつかと考へた。

しかし、タマキがダイニングバーの前に戻つてみるとメグルの姿はなかつた。

「……あれ？ 及川さん？」

キョロキョロと辺りを見回してみる。

(いない……)

タマキは依子の誤解を解けなかつたど「ひかり」に怒りせてしまつた事を言わずに済んだ事にホッとすると同時に、

メグルの姿が消えてしまつていた事にがっくりと肩を落とし、深い溜め息を吐いたのだった。

「バカ野郎———っ！」

署に戻つたタマキはいきなり怒鳴られていた。

誤認逮捕をしてかした上、とりあえずの謝罪だけしか出来なかつたからだ。

“絶対に誤認逮捕の事が外部に漏れないように口止めをしろ”

そつ上層部から言われて慌ててメグルを追い掛けたのだ。

もちろん彼女自身、謝罪したいという気持ちがあつたからあちこち走り回つてメグルの事を搜した。

そうして、よつやく見つけて謝罪と上層部から命じられたとおり食事に誘つた。

だが、結果は食事にも誘えなかつただけでなく、彼と約束をしていた人物に誤解をとえた上、

怒らせてしまつたのだ。

タマキはもう何をどう言い訳したとしても無駄だと思い、懇々と繰り返されるお説教をただじつと聞いていた。

一時間後 、

タマキはよつやくお説教から解放された。

「お疲れ」

自分のデスクに戻ると相方は是永が苦笑いしながら熱いコーヒーを

淹れてくれた。

「ありがとうございます……」

喉くより言つてカップに口をつけるタマキ。

「今回も始末書か?」

「いえ……しばらく様子を見るそ�です……もし、誤認逮捕がマス
ノハレばレたら……始末書ビリビリじや、

済まないかもです……」

「……そか」

「私……是永さんの足を引つ張つてばかりですね……」

「どうしてだ?」

「だつて……私がいつもヘマをするからバティの是永さんまで評判悪くなつちやう……」

「でも、俺はお前の事、一度も足手纏いだとか迷惑だなんて思った事はないぞ?」

「どうしてですか?」

「“頑張つてゐる”からだよ」

「??.?.?」

是永の言葉の意味がわからず首を捻るタマキ。

「お前はまだ刑事としては新人だ。新人は男であれ女であれ、どんな職種であろうつといふいろしでかすもんなんだよ。」

それを上手くフォローしてやるのが俺達先輩の役目だと思つてゐる。

実際、俺だつて新人の時は先輩達にたくさん助けて貰つた

是永は二十八歳のキャリア組。

二十歳のノンキャリア組のタマキとは立場がまるで違つ。

それでも、警察学校から交通課を経て晴れて捜査一課へと異動が決まつてから、ただがむしゃらに仕事をこなしてきた。

だが、最初の一週間で当時「コンビ」を組んでいた別の男性刑事から「コンビ解消を言い渡された。

原因は女であるタマキが足手纏いだという理由だった。

そんな時、声を掛けてくれたのが是永だつた。

元々は課長命令で決まつた新バディだつたが、

『男だとか女だとか、そんなの関係ない。俺は組みたいと思つ奴と組む』

そつと、是永はタマキに握手を求めた。

タマキはその手を握つた。

是永の手はとても温かかった。

「俺は今回の事で仮令マスク//お前が叩かれるような事があった
としてもコンビを解消する気はない」

「え……」

タマキは思わず顔を上げた。

「最初に言つただろう。『コンビを解消する時まだひらかが退職
した時だつて』」

「は、は……」

「明日、署長と一緒に及川さんの勤務先と一緒に謝罪に行こう。

誠意をもつて及川さん謝罪をすれば、彼だつてきっとわかつて
くれるや」

「はー」

「それじゃ、お疲れ

是永はやつと軽く手を挙げて帰つて行つた。

「お疲れ様でした」

タマキはそのまま後姿におじめをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3046ba/>

メグタマ！

2012年1月14日21時52分発行